

1月「Feuerwerk」 アントニア・シュルト

日本と違って、ドイツでは花火シーズンが夏でなく、冬です。より正確に言えば、新年を迎える習慣として、12月31日零時から一時間の間だけ一般人に打ち上げ花火が許されます。パーティー用クラッカーなどを除き、花火の販売には制限があり、大晦日だけ購入できます。私は子供の頃その日を楽しみにして待っていました。普段、いたずらなどに興味が少ない父と爆音花火で母のコンポストを爆破した記憶があります。夜になってやっと、近所の子供と道で遊んで、空っぽの瓶で花火を打ち上げたり、かんしゃく玉を投げたりして盛り上がりました。次の日の赤い火薬で汚れた雪や道もよく覚えています。あの時住んでいた所では、家庭ずから人、二人が元旦の早朝掃除に派遣されていましたが、大都会ではそのようなコミュニティーの不文律がないため、近年「あとの掃除」は話題となって、まるで花火を散らすように激しく議論されてきました。自治体の負担になる清掃費を別にして、環境保全主義者や動物愛護者からの批判の声がよく聞こえてきます。今年は、政府でも無視できなくなった批判の声に加えて、コロナ対策を焦点に、花火は人が大勢集まりそうな活動とされ、禁止されました。大人の目で見てもたら、花火に伴う弊害は圧倒的すぎて、しない方が時宜に適しているのかもしれませんが、本当に楽しみの少ない一年だったなとも思います。